# 2017 年 第 4 問

ジャンル: 線形代数・微分方程式・漸化式
難易度: Hard

> **📖 問題の概要**
> 行列値をとる力学系の問題。(1),(2),(3)は固有値が保存する連続な系であり、(4),(5)は固有値が保存するという構造を保つような離散版になっている。ほとんど似たようなことをすれば良いが、各々簡単にはいかず難しい。

### (1)

同じ大きさの行列 $A, B$ に対して、

$$
\begin{aligned}
(A,B)^\top &= (AB+BA)^\top = B^\top A^\top + A^\top B^\top = (A^\top, B^\top) \\
[A,B]^\top &= (AB-BA)^\top = B^\top A^\top - A^\top B^\top = -[A^\top, B^\top] \\
(A,B) &= (B,A) \\
[A,B] &= -[B,A] \\
-(A,B) &= (-A,B) = (A,-B) \\
-[A,B] &= [-A,B] = [A,-B]
\end{aligned}
$$

である。

$$
\begin{aligned}
\frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t}X(t)^\top &= \left(\frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t}X(t)\right)^\top \\
&= [(M, X(t)), X(t)]^\top \\
&= -\left[(M, X(t))^\top, X(t)^\top\right] \\
&= -\left[\left(M^\top, X(t)^\top\right), X(t)^\top\right] \\
&= \left[\left(M, X(t)^\top\right), X(t)^\top\right]
\end{aligned}
$$

ただし、5 行目の等号では $M$ が歪対称であることを用いた。
また、$X(0)^\top = X_0^\top = X_0$ より、微分方程式の解の一意性から $X(t) = X(t)^\top$ で $X(t)$ は対称である。

### (2)

実際に $QX_0Q^\top$ を $(*)$ 式に代入して、$X(t)$ と同じ微分方程式に従うことを確認する。

$$
\begin{aligned}
\frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t}\left(Q(t)X_0Q(t)^\top\right) &= \left(\frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t}Q(t)\right)X_0Q(t)^\top + Q(t)X_0\left(\frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t}Q(t)\right)^\top \\
&= (M, X(t))Q(t)X_0Q(t)^\top \\
&\quad + Q(t)X_0Q(t)^\top(M, X(t)) \\
&= (M, X(t))X(t) + X(t)(M, X(t)) \\
&= [(M, X(t)), X(t)] \\
&= \frac{\mathrm{d}X}{\mathrm{d}t}
\end{aligned}
$$

さらに、$Q(0)X_0Q(0)^T = X_0$ より初期条件も満たすので確かに $(*)$ の解であり、$X(t) = Q(t)X_0Q(t)^\top$ である。

## (3)

$Q(t)$ が直交行列だと嬉しいので、実際に確かめる。

$$\begin{aligned}\frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t}\left(Q(t)^\top Q(t)\right) &= \left(\frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t}Q(t)\right)^\top Q(t) + Q(t)^\top\left(\frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t}Q(t)\right) \\ &= -Q(t)^\top(M, X(t))Q(t) + Q(t)^\top(M, X(t))Q(t) \\ &= 0\end{aligned}$$

よって $Q(t)^\top Q(t) = Q(0)^\top Q(0) = I$、すなわち任意の $t \geq 0$ に対して $Q(t)$ は直交行列である。

$Q(t)$ が直交行列であることから、

$$\begin{aligned}|\lambda I - X(t)| &= \left|\lambda QQ^\top - Q(t)X_0Q(t)^\top\right| \\ &= |Q(t)|\ |\lambda I - X_0|\ \left|Q(t)^\top\right| \\ &= |\lambda I - X_0|\end{aligned}$$

よって、$X(t)$ の固有多項式は $X_0$ の固有多項式と等しいため、$X(t)$ は $X_0$ と同じ固有値を持つ。

## (4)

帰納法で示す。

- $k = 0$ のとき $X_0$ は対称で $Q_0 = I$ なので ok。
- $k = l$（$l = 0, 1, 2, ...$）で $X_l, Q_l$ が一意に定まり、$X_l$ が対称行列であるとする。

$$\frac{Q_{l+1} - Q_l}{\Delta t} = (M, X_l)\frac{Q_{l+1} + Q_l}{2} \Leftrightarrow \left(I - \Delta t\frac{(M, X_l)}{2}\right)Q_{l+1} = \left(I + \Delta t\frac{(M, X_l)}{2}\right)Q_l$$

$X_l$ は対称、$M$ は歪対称なので、$(M, X_l)^\top = -(M, X_l)$、すなわち $(M, X_l)$ は歪対称行列である。歪対称行列の固有値は純虚数なので $\left|I - \Delta t\frac{(M, X_l)}{2}\right| \neq 0$ であり、$I - \Delta t\frac{(M, X_l)}{2}$ は可逆である。
したがって $Q_{l+1}$ は一意に定まる。
$X_{l+1} = Q_{l+1}X_lQ_{l+1}^\top$ なので $X_{l+1}$ も一意に定まり、

$$\begin{aligned}X_{l+1}^\top &= \left(Q_{l+1}X_lQ_{l+1}^\top\right)^\top \\ &= Q_{l+1}X_l^\top Q_{l+1}^\top \\ &= Q_{l+1}X_lQ_{l+1}^\top \\ &= X_{l+1}\end{aligned}$$

で $X_{l+1}$ は対称行列である。
したがって任意の $k = 1, 2, ...$ に対して、$X_k, Q_k$ が一意に定まり、$X_k$ は対称行列である。

## (5)

任意の $k = 1, 2, ...$ に対して、

$$
\begin{aligned}
D_k &\coloneqq Q_k^\top Q_k - Q_{k-1}^\top Q_{k-1} \\
&= (Q_k - Q_{k-1})^\top Q_k + Q_{k-1}^\top (Q_k - Q_{k-1}) \\
&= \Delta t \left( (M, X_{k-1}) \frac{Q_k + Q_{k-1}}{2} \right)^\top Q_k + \Delta t Q_{k-1}^{\top (M, X_{k-1})} \frac{Q_k + Q_{k-1}}{2} \\
&= -\frac{\Delta t}{2} \bigl( Q_k^\top (M, X_{k-1}) Q_k - Q_{k-1}^\top (M, X_{k-1}) Q_{k-1} \bigr)
\end{aligned}
$$

$D_k$ は対称かつ歪対称なので $D_k = D_k^\top = -D_k$ より $D_k = 0$ である。したがって $Q_k^\top Q_k = Q_0^\top Q_0 = I$ であり $Q_k$ は直交行列である。
したがって、

$$
\begin{aligned}
|\lambda I - X_k| &= \left|\lambda I - Q_k X_{k-1} Q_k^\top\right| \\
&= |Q_k| \, |\lambda I - X_{k-1}| \, \left|Q_k^\top\right| \\
&= |\lambda I - X_{k-1}| \\
&= |\lambda I - X_0|
\end{aligned}
$$

よって、$X_k$ の固有多項式は $X_0$ の固有多項式と等しいため、$X_k$ は $X_0$ と同じ固有値を持つ。